



1636年～1869年(約230年)

伊予西條藩を知る ⑧

(第一次西條藩)一柳家、(第二次西條藩)松平家

第5代藩主 松平頼淳 (在任期間 1753～1775年)



第5代西條藩主 松平頼淳(よりあつ) は、紀州藩6代藩主 **徳川宗直**の次男で、宗直は西條藩第2代藩主 **松平頼致**でした。この頼淳は、紀州藩第8代藩主 **徳川重倫** (29歳|第8代将軍徳川吉宗の長男)が病気のため隠居すると、紀州家に戻ってわずか5歳の岩千代(後の第10代藩主 **徳川治實**)に代って宗家・紀州藩9代藩主となり名を **徳川治貞**(はるさだ)と改める(安永4年|1775年)。徳川治貞は、名君の誉れ高い熊本藩第8代藩主・細川重賢と並び「**紀州の麒麟、肥後の鳳凰**」と賞された名君で、「**紀麟公**」と呼ばれた。

西條騒動、西条三万石騒動 宝暦3年(1753)

(第2次西條藩の百姓一揆は、唯一この1件だけだった。)

松平頼淳(25歳)が藩主になった宝暦3年、大豊作になったことを幸いに藩御留守居役らが協議し、藩財政難を打開しようと、今迄の春免(作付け前に見込収穫量によって年貢量を決定する)による年貢の賦課を廃止し、見取免(秋の収穫量で年貢量を決定)による年貢の賦課に改正することを、江戸屋敷に居る藩主に上申して年貢を徴収した。享保の大飢饉以来、前年まで村によっては違いがあるものの、春免三ツ五分(35%)前後の低い状態が続けられた年貢が、宝暦3年は見取免になって年貢を四ツ五分(45%)と一気に高率になり徴収された。特に、国領川両岸(現新居浜市)の村々では3割近くの増額だった。急な年貢増徴策は、従来の低率年貢高を基礎に小作料が決められていた地主・小作関係にも影響し、両者の間に紛争の種をもたらした。このような状況の中で、大庄屋・庄屋による農民の説得が続けられたが、宝暦3年12月10日、新居郡50か村のうち16か村までの農民たちが加茂川河原に集結(約6,000人)し、西條藩庁に嘆願書を提出し減免の強訴を行ったが一切受け付けられなかった。このとき農民の怒りが爆発した一揆の首謀者は、新居郡郷村又野の村上平兵衛、宇高村の高橋孫兵衛、澤津村の高橋弥市左衛門の3人であった。この一揆は、藩当局の説得が攻を奏して農民たちは帰村し沈静化した。後日、農民の要求を入れて定免を採用することが告げられ、農民らの希望が受け入れられた。一方、藩当局は一揆の首謀者であった三名を捕らえ、いずれも死罪と決まり1年後の宝暦4年11月21日に西條榎木(なぎのき)の刑場(現・西条図書館付近)で処刑され、村上平兵衛の首は加茂川堤に晒された。その後、藩主はこれを哀れみ伊曾乃神社境内に、又野神社を建立し3人の霊を祀った。(又野の三人衆)



西條藩は参勤交代のない定府の大名だったので、3代藩主松平頼渡公以来、9代藩主松平頼学までの106年間西條藩主の御国入りはなかった。藩主は、江戸にて徳川幕府を支えていた。

参考資料：西條市誌(西條市)、西條人物列伝(西條郷土史研究会)、池畔の柳影(愛媛新聞社)、

愛媛県生涯学習センター「えひめの記憶」、加茂公民館だより、西条市生活文化誌(西条市)